

# 燕尾服着初の記

徳富盧花

青空文庫



此れは逗子づしの浦曲うらわに住む漁師にて候、吾れいまだ天長節外務大臣の夜会てふものを見ず候ほどに、——と能のうがりの足どり怪しく明治卅二年十一月三日の夕方のそりく、新橋停車場の改札口を出で来れるは、斯く申す小生なり。

懷中には外務大臣子爵青木周蔵、子爵夫人エリサベツトの名を署しよしたる一葉えふの夜会招待券を後生大事と風呂敷ふろしきに包みて入れたり。そも此の招待券につきては、待つ間の焦せうしん心、得ての歡喜、紛失の恐れ、掏摸すりの心配は、果たして如何なりけん。貧乏人が一万円

の札を手に入れたる時の心地ぞ斯くある可しと思ひぬ。偕招待券は首尾よく手に入りぬ。一難わづか纔に去りて一難また到る、招待券には明記して曰く、燕尾服着用と。燕尾服、燕尾服、あゝ燕尾服、爾なんぢいかんを如何。小生の古つゞらたくはに貯ふる処は僅にスコツチの背広が一領りやう、其れも九年前に拵こしらへたれば窮屈なること夥おびたゞしく、居敷あしきのあたり雑ざいふきん巾の如くにさゝれて、白昼には市中をあるけぬ代物しろもの。あゝ困つたな、如何したものであらう、損料そんれう出して古着屋から借りるかな、など思うて居る内、燕尾服が無くて困るだらう、少し古いが余計なのが一領ある、貸してあげよう、ついでに着せもしてやらうと青山の兄から牡丹餅ぼたもちの様に甘い文言うまもんごん、偕こそ胸撫むねなで下し、招待券の御伴おともして、逗子より新橋へは来りしなりけり。

燕尾服の手前もあれば、停車場前の理髪店に飛び込み、早く早  
 くとせき立てながら、髪かみか剃り、髭ひげそ剃り、此れならば大丈夫と鏡を  
 見れば、南無三、頭は仏蘭西流とやら額ひたひのあたりだけ長く後うしろみ  
 短じかにつままれて、まんまと都みやこ風ふうになりすましたれど、潮風に  
 染めし顔の何処までも田舎らしきが笑止なる。よし／＼、本来の  
 田舎漢のなかもの、何ぞ其様な事を気に介かいせむや。吾此の大の眼を瞠みはりて  
 帝国ホテルに寄り集つどふ限りの淑女紳士を睨にらみ殺し呉れむず。昔木  
 曾どの殿と云ふ武士もありしを。

車を飛ばして兄の家に着けば、日暮れたり。其れ夕飯よ、其れ顔洗ふ湯をとれ、と台所を犇めかして、夜会の時間は午後八時、まだ時もあれど用意は早きが宜しと、早速更衣にかゝりぬ。

兄、嫂、阿甥、阿姪、書生など三階総出の舞台の中央にすつくと突立つ木強漢（むくつけをとこ）。其れ鞆（くつした）をお穿きなさい。鞆は穿きぬ。今度は糊のごわくしたる白胸シャツを頭からすつぽりかぶされて、ぐわさぐわさと袖を通せば是はしたり袖、拳を没すること三四寸。

「まあ、如何しませう」

「縫あげするさ」

「一寸と糸を持つて御出」

腕えびを つて毒箭どくやの毒をぬかせた関羽くわんうもどきに、小生はほかんと立つてぬつと両手を出して居れば、阿姪あてつが笑ひく縫い上げをなし終りぬ。シヤツの肩上げは濟みたり。いでカラアの釦鈕ボタンをはめむとするに、手の短いかはりに、頸くびは大きく、容易はまに箆はらず。幸なるかな、書生君は柔術の達人なれば、片手に咽のどをしめ、片手にカラアをひいて、頸くびはやうくカラアに入りぬ。此間小生は唯運を天に任し、観念まなこねの眼を瞑つぶつて、屠ほふられむとする羊の如くたたずイみたり。

あとはネクタイ、ズボン、チヨツキ 胴衣、コート 上衣、と苦もなく着せられ、白の手てぶくろ套は胸のポケットに半分出して入れて置くものと教へられて、此れで装束は一先づ成りぬ。

「立派々々、其れ鏡」と見せらるゝ鏡の中を覗けば、あらは顛れたり一個の紳士、まつくろらしや真黒羅紗の間より雪とかゞやき出でたる白シヤツに赤黒の顔のうつりも怪しく、満面に汗ばみて、のど咽のあたり赤き擦すり傷りきず（けだ蓋しカラアと咽の合戦の結果）一きは目だち、咽をカラアにしめられてしきりにかたづ堅睡をのむ猪首みくびのすわり可笑しく、胸をシヤツチヨツキ胸衣にせば窄められてコルセットを着けたるやうに呼吸苦しく、さなが全体宛ら糊されし様にしやちば鯁張りかへつて、唯真すぐに向を見るのたちあふるまひみ、起居振舞自由ならざる、どう如何しても明治の木曾殿と云ふ容りさま子。あゝ如何しても「かりぎ」はまづい、窮屈な燕尾服でつまらぬ夜会とかをのぞ覗かうより、もめんじま木綿縞に兵児帯、いぬころし犬殺のステツキをもつて逗子の浜でも散歩した方が似合つて居た、と思つて

最早斯うなつてはあとの祭、阿姪阿甥書生等の眼を避けて、鏡に背そむいて澄すまし居たり。

暫くすると、最早時刻だ、出かけようとシルクハットを持つて、兄が出て来たので、吾も煙突を筒切りつゞぎしたやうにごわくしたるシルクハットをのせて、ズボンのちぎれを気にしてやうく靴をはき終わり、二輛の車はからくと玄関さきを出でたり。

(三)

二輛の車は勢いきほひよく走せて、やがて当夜の会場帝国ホテルにつき、電灯花瓦昼はながすを欺あざむき、紅灯空こうとうくうにかゝり、晴がましきこと云ふば

かりもなき表門をばぐるりと廻りて、脇門わきもんより入りぬ。去年の混雑こごに懲りて、今年は馬車と人車の入口を分かわかしなりとぞ。

クローケルム

外套室シルクハットに外套と帽子シルクハットを預けて番号札を受取り、右折す

れば電灯の光眩まばゆき大玄関おほげんくわんなり。柱をば杉檜の葉もて包み、大

なる紅葉の枝を添へ、壁際かべぎは廊下には菊花壇を作りて紙灯しちやうをと

もしたるなど、何となく鬼き一の菊畑でも見物する心地あり。偕主

人の鬼一殿は何処おほに在すぞと見てあれば、大玄関の真中に、大礼

服よそほひの装美々しく、左手ゆんでに劍けんぱを握り、右ごましほに胡麻塩ちようせんの長髯ぶを撫

し、厳いかめしき顔して、眼鏡を光らしつゝ、佇たゝずみたまふが、当夜の御亭

主青木外務大臣の君なり。相並んで一きは大きく二十四五貫目たしかにかゝりたまふべく思はれて、のさばりかへりて居たまふは、

子爵夫人エリサベツトの君。其の側に夫人の小さくしたる様なるが、  
 青木令嬢なるべし。吾が近眼にはよくも見えねど、何やらしろじ白  
 縷ゆす子やはらかに軟き白毛の縁ふちとりたる服装して、牙柄がへいの扇を持ち、頭うごの  
 揺うごく毎にきら／＼光るは白光プラチナの飾櫛にや。此の三人を正面にし  
 て、少しさがりて左手ゆんでには一様に薄うすいろ色すそもよう裾模様の三枚がさね、  
 縷しゆちん珍の丸帯、髪はお揃そろひの丸鬘まるまげ、絹足袋あさうらに麻裏と云ふいでた  
 ちの淑女四五人ずらりと立ち列ぶは外交官の夫人達。此方こなたに紅くれな  
 菊あぎくの徽章きしようつけし愛嬌あいけう沢山の紳士達の忙しげなるは接待係の  
 外交官なるべし。

斯かく眺め候ふほどに、先入の客は何れも亭主の大臣夫婦まづき たんでんに会釈  
 しはてゝのきたれば、今は小生の順番となりぬ。先氣まづきを丹田たんでんに

落つけ、震ふ足を踏しめ、づか／＼と青木子の面前にすゝみ出で、怪しき目礼すれば、大臣は眼鏡の上よりぢろりと一瞥、むつとしたる顔付にて答礼したまふ。次に夫人令嬢を一括して目礼すれば、夫人は怪訝の眼を睜りて、ぢろりと睨みまふ。肝を冷やしてそこに片寄り、群衆の中に立まじりて、玄関に入り来る人々を眺むるに、何れも／＼先づ子爵夫人に会釈して然る後主人に会釈す。しくじつたり、吾は何気なく主人を先にしたるが、此処は夜会の場、例の男尊女卑は大禁物、殊に青木子は済まなかつた、と思つても下司の智慧はあとで、後悔はさきに立たず。今宵の失策のし初めと、独頭かく／＼猶も入り来る人々を眺め居たり。

流れ入る客はしばらくも止まらず。夫妻連れの洋人、赤套

の英国士官、丸鬚束髮御同伴の燕尾服、勳章眩ゆき陸海軍武  
まるまげ そくはつ  
 官、商人顔あり、議員面あり。都貌あり、田舎相あり、髯  
みやこがほ あなかがほ ひげ  
 あり、無髯あり、場馴れしあり、まごつくあり、親しきは亭主夫  
 婦と握手して、微笑してかはす両三言、さもなきは小生と同様澄  
すま  
 しかへつた一点頭、内閣大臣、外国公使等身分高きは右なる特  
てんとう  
 別室に、余は左なる喫煙室婦人室にそれ／＼入り行く。  
たちま  
 忽ち青木外相夫婦及び令嬢が、ずうと玄関の入口まで出で行く  
かんゐんのみや  
 を何事と眺むれば、閑院宮同妃殿下の来りたまへるなり。群  
とうこうしよく  
 衆はさつと道を開きぬ。外相は桃紅色の洋服を召したまへる  
あひたつ  
 妃殿下を扶けて、先に立ち、宮殿下はエリサベツト夫人と相  
ありすがわのみや  
 携へて、特別休憩室に入りたまひぬ。やがて有栖川宮同妃

殿下、やましなのみや山階宮 同妃殿下も来たまひぬ。新に入り来る客は漸く  
 稀まれになりて、集つどへる客は彼処に一団、此処に一塊くわい、寄りて話し離  
 れて歩む。彼処に大きな坊ちやまの如くにこゝ笑ひながら話す  
 は、大山参謀総長なり。此処に眉まゆを顰ひそめて語るは児島惟謙氏こじまみけんなり。  
 顔も太く、腹も太く、肝きも太く、のそりゝと眼をあげて見廻すは  
 大倉喜八郎氏なり。黄海の勇将は西比利亞さいべりあの横断者と話し、議員  
 の勇士は学界の俊秀と語る、何処を見ても名士の顔かほ揃そろひ、日本  
 の機関を動かす脳髓は大抵此処に集まつて居ると思へば、彼処の  
 話も聞いて見たく、此処の顔も覗のぞきたく、身は一つ心は千々に走  
 せまはつて、匆々そうく忙々ぼうくと茫然自失する折から人を躍をどり立たす  
 様な奏樂そうがくの音起つて、舞踏室の戸は左右に開かれぬ。

## (四)

洋々たる奏樂の音起ると共に、外相は有栖川宮妃殿下を扶け、  
 有栖川宮殿下はエリサベツト夫人と相あひたづさ撃へ、其の他やんごと  
 なき方々香水のかをりを四方に薰くんじつゝ、舞踏室に入りたまひぬ。  
 其のあとより舞踏手と見物と吾れさきに進み入る。余は素もとより舞  
 踏しやれなど洒落た事には縁遠き男なれど、せめて所いはゆる謂ウオールフ  
 ラワアの一人ともなりて花舞ひ蝶躍る珍しきさまを見て未代まで  
 の語り草にせばやと、人の背後よりのそく舞踏室に入りたり。  
 此処は帝国ホテル随一の大広間ホール。正面には緑りよくえふ葉の地ぢに「聖せ

いじゆばんざい

壽萬歳

と白く菊花にてぬきたる大額をかゝげ、天井には隙

きま

間もなく列国旗を掛けて、五色のアーケ灯の光もあやに、床は鏡

の如く磨きたればきら／＼しく照り渡りて、燕尾服、桃紅色服、

ときいろふく

水色服、扇影、簪光参差として床の上に落ち散りたり。氷

せんえい

さんくわうしんし

よりも滑かなる床のすべり易きに、吾は小心翼翼々としてぬき足さ

し足一分刻みに歩みつゝ、壁際に置かれたるソファの辺に立ち

あたり

見る。はや「カドリル」ははじまりて、聞くだにも吾足のひよこ

／＼浮き立つ陽気の調につれて、幾組の和洋男女は規則正しく一

しらべ

歩々々歩み出でては、また一歩々々歩み帰る。やがては入れ乱れ、

入れちがへ、手をとり、くゞり、寄り、離れ、コムビネーション

の妙を極む。「ワルス」はあまり気にくはねど、「ポルカ」「ガ

ロツプ」 「ランセース」 いづれもさら／＼と元気よく、躍をどりにして  
 も体操にしても極めて面白く思はれたり。数番の舞踏済みて、額ひたひ  
 に加ふる白手巾ハンケチ、胸のあたりに閃ひらめく扇、出で、ラムネを飲むあ  
 れば、彼方此方と巡廻へめぐりて、次の番組の相手を求むあり。きちよ  
 うめんなる山やまがた 県首相は閑院宮殿下、有栖川宮殿下と立ちながら  
 何か話せば「聖壽萬歳」の額の下なるソファには各妃殿下花の如  
 くくさりに坐して外国使臣の夫人なんどの挨拶に答へたまふ。時計の鍵ひく  
 を繻しゅちん 珍の帯の上に閃かしたるちゞれ毛の束髪ひくの顔は醜ひくくたけ矮  
 き夫人の六尺近き燕尾服の良人の面仰ぎつゝ何やらん甘へたる調  
 子にて物尋ねらるゝ、曙あけぼのそめ 染ふりそでの振袖たけながに丈長しろのいと白りよくう緑  
 鬢びん にうつりたる二八ばかりの令嬢の姉なる人の袖に隠れて物馴

れたる男の言ふものいに言葉はなくて辞儀ばかりせられたる、蓄音機と  
速はやどり撮写真と欲ほしき事のみ多し。斯る間を主人の外相の足にまつ  
はる剣をうるさげに左手ゆんでに握りて、眼鏡の顔を少し仰むけ、あち  
こち行きかへりして心つけらるゝ御苦勞千万——思へば外務大臣  
にも減多になれぬものなり。

室内の温氣うんきの耐へ難きに、吾はそつと此処を滑り出で、喫煙室  
の方に行きぬ。婦人室の前を過ぐる時、不図ふと室内を見入れたれば、  
寂せき々たる室の一隅の暖炉ようを擁し首あつを鳩めて物語る二人の美人。  
よくよく見れば、伊東巳代治みよぢの君と岡崎邦輔の君となり。何れ劣  
らぬ梅桜、世にもしほらしき人達にて在おはせば、婦人室は尤も似つ  
かはしく、何事をか語らひて居たまひけん。其は知らねど、政治

小説でも書く人ならば、見のがすまじき場シーンなるべしと思ひたりき。

喫煙室には煙草の煙の間に、談話湧き、人顔おぼろに見え、テーブルの上には錦にしきて手の皿にまき羊羹ようかんの様なるものを積みたり。先刻より空腹に、好物のまき羊羹を見て咽のんどしきは頻りに鳴る。一つつまんで見て呀あつと心に叫びぬ。南無三、此は葉巻だ、喫煙室に葉巻の接待はさうあるべき筈。君子は義さとを喻げり下戸は甘さときに喻げる、偕こそ御里があらはれたれ、眼が近いに気が遠いと来て居るので、すんでの事に葉巻を一口に頬張ほくばつて、まんまと耻を帝国ホテルに曝さらす所だつた。誰か気づきはしなかつたかと恐こは々々ながら見廻せば、そんな様子もなし、あゝ危いかな、君子危きに近寄らず、こんな所は早く出るに若かずとそこくに喫煙室を廊下に出る時、

はたと行き逢ひたる二人の一人は目から鼻へぬける様な通人の林田翰かんちやう長、半面の識しきもあればと一礼するに、何しに來たと云ふ様な冷瞥れいべつを頭から浴あびせられ、そこゝに退陣しつ。今一人の薄汚なき小男を後にて聞けば、失敬な世に安伴あんばんと呼ばれて中々なか／＼あまあま甘くない精悍せい／＼機敏きびんの局長なりけり。

左る程に舞踏の五番済みて、立食の堂開だうかれたれば、衆しゆうひん賓

吾もゝと急ぎ行く。吾もつゞいて入るに、こゝは此度新に建てし長方形の仮屋かりやにて二列にテーブルを据ゑ、菓子たふの塔柿林檎の山、小豚まるにの丸煮、魚、鳥の丸煮など、かずゝの珍味を並べ、テーブルの向ふには給仕ありて、客の為に皿を渡し、物を盛る。吾は皿とナイフ、フォークを受取りておづゝ小豚を襲ひたれども、皮硬か／＼

うして素人しろうとの手に刻まれねば、給仕を頼みて切りて貰ひ、片隅に割かつきよ扱よし、食ひつゝ四方を見るに、丸まるまげ髻まげの夫人大口開いて焼鳥を召し、金縁きんぶち眼鏡の紳士林檜柿など山の如く盛りたる皿を小脇わきにかゝへて「分捕ぶんどり々々」と駆けて来たたまふなど、ポンチの材料も少からず。中にも面白きは清国しんこくじん人の何れの身分ある人物にや、緞子どんすの服の美々しきが、一大だいへい皿を片手に、片手はナイフ、フオクを握りて、魚と云はず、鳥と云はず片端より截きりては載せ、截りては載せ、こゝを先途せんどとまづ貯たくはへたまひけるが、何れの武官にやそゝくさ此方へ来らるゝ拍子ひやうしに清人の手にせし皿を斜ななめめにし、鳥飛んで空にあり、魚床ゆかに躍り、折角の赤筋入りたるズボンをおたらだいなしにして呆然ぼうぜんとしたまひし此方には、件くだんの清人しんじん惜

しき事しつと云ひ顔に遽あわて、床の上うへなるものを匙さじもてすくひて皿かへに復かへされたるなど、其の国の氣風性せいへき癖も見えて面白かりき。

食堂を出で、再び舞踏室に入る。夜は漸く深けて興いよく深し。ワルスの調面白く、吾も内々ないく靴のかゝとを上げ下げして、今にも踊り出さうになりぬ。忽ち場内のわあつと騒ぎ立ちて、撞どと音おとするを見れば、斯は如何に紅くれなゐ色の洋装婦人と踊り狂へる六尺ゆたかの洋人の其の鼻尤も鳶もつととびに似たるが、床の滑かなるに足踏み込らして、大山の頰くづるゝ如く倒れしなりけり。洋装婦人の顔は着たる衣の其れよりも紅くれなゐになりぬ。倒れし男はそこゝに舞踏室を逃げ出したり。

成程花は半開、興は八分、あまりに狂あやまちへば過あやまちに終る、最早夜も

一時を過ぎて、宮家の方々も帰たまひぬ。さき程よりストオウ  
 の暖氣、ヴァイオレットの香かほり、嬌けうこうえんし紅艷紫の衣の色、指環腕環ゆびわうでわの  
 金玉の光、美人（と云はむは偽いつはりなるべし、余は不幸にして唯一人  
 も美人をば夜会の席に見る能はざりければ）の微笑、勲章大礼服  
 の閃き、などに射られて少々逆上のぼせ気味の、長座せばいよ／＼のほ  
 せて、木曾殿も都みやこ化くわして布衣ほいを誇る身の万一人じんしやく 爵やく崇拜と  
 宗旨しゆうしかへ変かへでもしては大変、最早こゝらが切り上げ時と、先刻より  
 はなればなれになりし兄を尋ぬるに、これはずるい、いつかさつ  
 さとお帰りになつて居る。

後おくれたり、と玄関に走せ出で、やつと車を見出して、急げ／＼  
 と車夫を急がし、卅分後に兄に窮屈千万なる「余が最初の燕尾服」

を脱ぎぬ。

# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻75 紳士」作品社

1997（平成9）年5月25日第1刷発行

底本の親本：「蘆花全集 第三巻」蘆花全集刊行会

1929（昭和4）年2月

入力：浦山 敦子

校正：noriko saito

2009年6月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 燕尾服着初の記

徳富盧花

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>